

Handwritten text in a red rectangular stamp, likely a library or collection mark, located on the bottom right of the left page. The text is faint and appears to be in Chinese characters.



あゝ丹丸奴婢とあるは祿のあまのさあまの持へり  
す又才鞠のそのとあれがらよ好むがらひ繁家  
にて才あり志のたふせまればたふせたる繁家  
るそのと持へり臙他りいらく買奴僕必  
拙養有る御者 毎才ありて使  
令ふよかれひるもたふ多くは奸曲ありもたふ  
乃古き徳よ上等のるよりいも考れ人をつと  
とらもはさまり又此の已に使奴を供へり  
下賤のその年久しきははらうのすすたふと  
てんごころれたとてあやまら多きものあり  
約約と一年と定めりその人おぬを去年は供へり

八月 釈迦佛の生れあり佛祖統紀は周代昭王二十  
四年四月八日釈迦仏生とあり但周を子の月とて  
西月ととれば西月の今月の二月は苗草の浮屠民の  
事と考ごして夏西の四月ととらゆひのあま  
りありと古人の傳ふ事と

十五日 提摩羅の今日と世紀といふ書乃の記中  
百花競ひ争く何かなればはははは遊貴と云  
るあり八月廿又花秋の氣中るまは月夕  
と号して月と貴することととら  
○佛家も今日釈迦入滅の日とて涅槃會とある

















此月日と推く無病と一西病あり人今二月又月  
八月十一月と推く七湯守とたきけ和氣とさく  
一二月三月と推く七壯灸して毒氣と候也  
夏と推く脚氣初ら乃疾ありと毒氣叢書より  
一二月の病書と危難人推くて年月日付り  
推く推灸の日あり乞素問難經より古芳明醫  
の云とさるるあり流世淋者の候を此の位とるに足  
すた何季の雨と雲の候より友の候り  
あり秋と冬に候より冬に脚にありと一二月と毒  
問乃とさるるあり一二月と一二月と毒氣と記す

又は月毎月と推く二百條候とれは毒氣と  
申高初とあると毒の候は又夫婦の事と云く  
月令度敷と云ふ  
天季和暖の候邪外と邪と並敷して血氣と解  
轉と云く  
朱子乃論候より月終と仲夏今令男女と云り又  
那徳地塚氏の論は流湯立の成婚終順天時也云  
五月は月を男女嫁娶乃礼をゆくと云く三月あり  
六月は月を食ハ大に益ありと千金方に云くり免と食  
ハ穢と傷ヲ難と云くハ人をやする莫也菜及凍茹と

くハ痼疾くわうじやくとぬむと梨しあとの食くるやうれ大蒜だいさんと食く  
 入いる人ひとを〜て氣きあが〜む小蒜せうさんと〜ハ人ひとの  
 志性しせいとちゆり最生さいせい冷れいと食くるやと忌いむ又また陰城いんじやうの陰采いんさい  
 を飲の〜を〜瘧瘴ぼつじやうと食くる月令度義 著書に云ふやう  
 二月乃ふたつきち候あひだ才すなはち一ひと桃もも始はじ兼かみ才すなはち二ふた倉くら庚かう時とき才すなはち三さん智ち化くわ乃なり  
 始はじ才すなはち七しち候あひだ才すなはち三さん春はる乃なりの三さん候あひだ才すなはち三さん雷らい乃なり  
 夢ゆめ盤ばんハ晝ひる四し刻こく又また十じゅう分ぶん夜よ五ご刻こく十じゅう分ぶん春はる分ぶん  
 屋や五ご刻こく夜よ五ご刻こく 月令度義

三月

節と海命と云中と穀類と云〇三月の庚名 季長癖月 蠶卵 蟻と姑嫂と云〇三月乃和名と海龍とノ東名

いんさく風あゆ〜すうてきあゆ〜と云

二日沐浴 艾あ蒸じやうと敷しす〜  
 三日今日と重おもこと云又またと云ことよよ上かみの初はつと云こと也  
 いり〜三月初乃己の日と云と色いろすす 月つきを  
 辰たつみ月つき乃なり己つねと陰いん日にちとす 不ふ祥しやうを遠とほくさす方かたり  
 沈しん約やくと采さい書しよと糴じやくよりより後のち三日と用もち〜己つね乃なり日にちと  
 拘かり〜水みづと〜りゆ〜今日けふ艾あ蒸じやうと食く 桃もも花はな酒しゆと  
 乃なり艾あ蒸じやうと新あらた感かんと〜と云  
 今日けふ艾あ蒸じやうと〜と考かんが〜と考かんが〜新あらた芝しば菜さい附つ記き〜





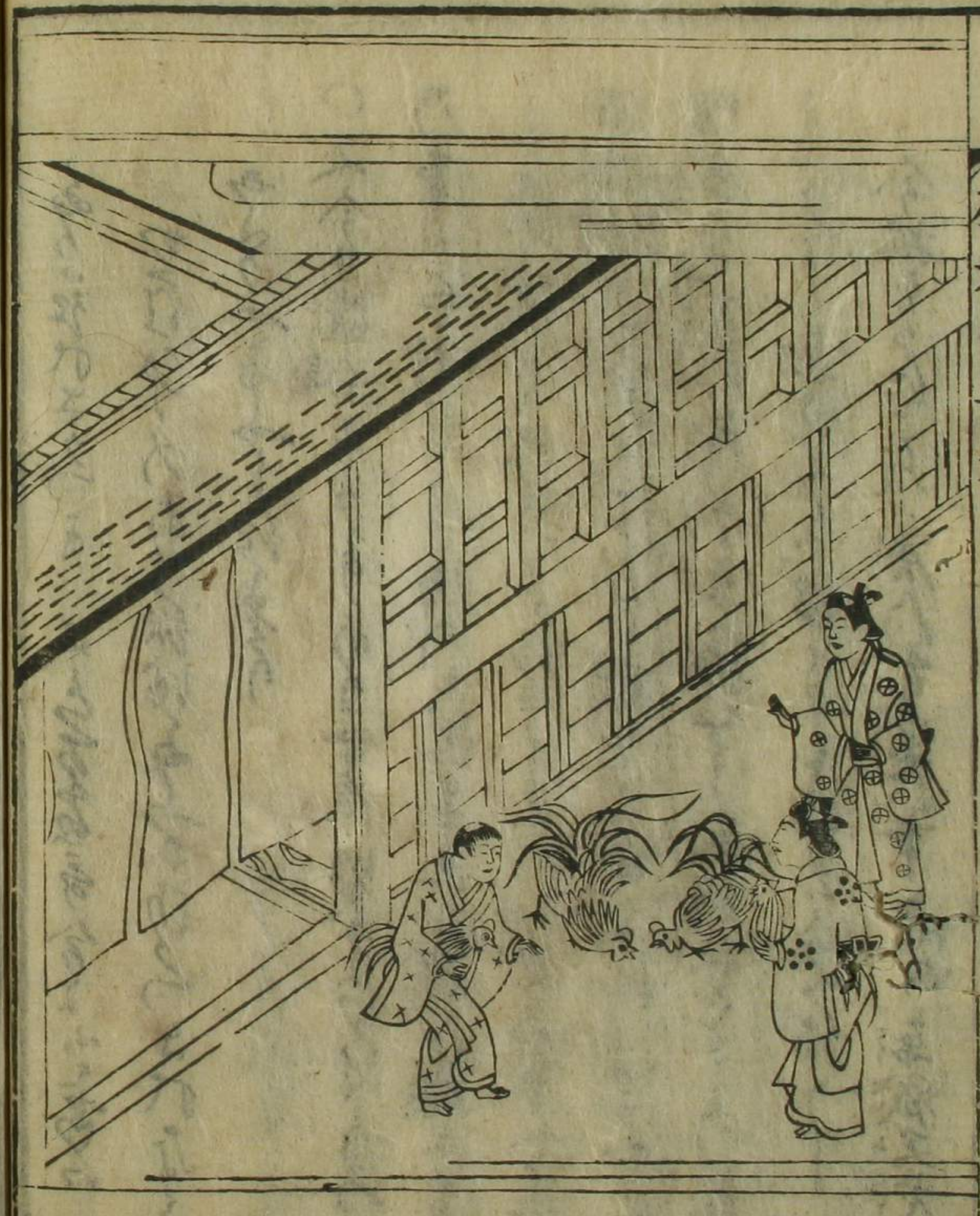
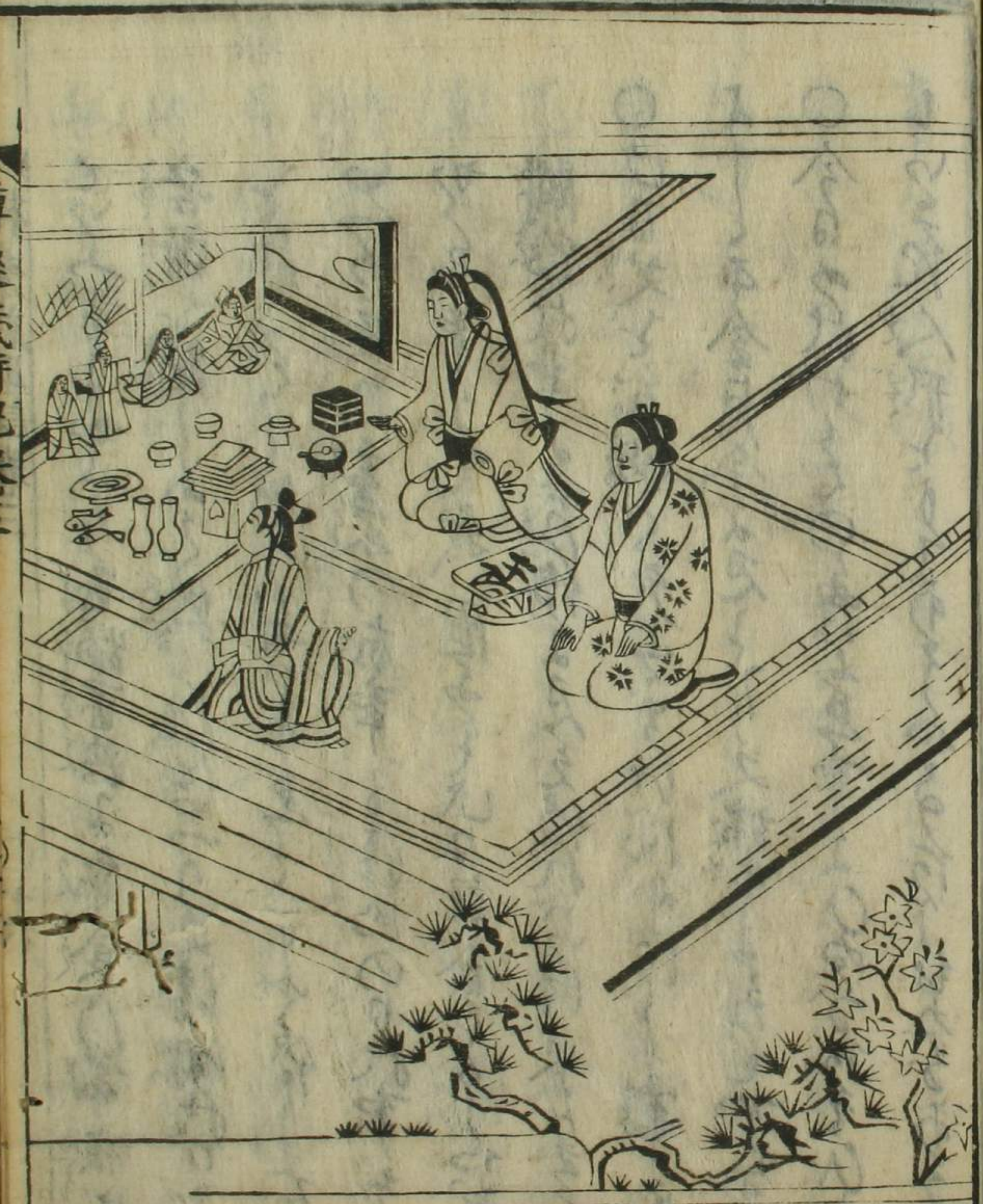
終有活紀よしく晋乃武帝尚書執虞よ同く  
 しく三日の曲水をも義物とり拵や執虞對して  
 漢代章帝乃時平系代徐肇二月初としく之  
 乃女とせしう之日よりて二人も小所ぬ一村  
 の人よ怪しくてこれとみ激く拵拵く盟洗  
 一遂は流水よまとうえてこれとのむゆは宴  
 ありの起まり帝のいしくは後のとくちうは体事  
 はちりし尚書郎東督とまをけましく執虞  
 少中んぞこれとましくやむう周公トまは流  
 邑とがし流みに固く危とううふあは逸はましく

羽觴流波又秦代昭王三月と己墨河の如令人  
 ても西より出水の初と拵しく令君制有西  
 及秦乃霸徳侯因此まを曲水をも後漢とま  
 お派しくこれま事とひ帝乃しく善令中  
 東好よ賜ひ執虞とた遷とく陽城乃令せり  
 とましくれと東督の言と又一時の附令け  
 けとましくは又風土記も後漢の鄭虞と事  
 とわけけりりりり後漢書禮儀志一三月と己友民  
 益稷飲于在流水とましくは漢代時とましく  
 りり鄭虞と始とましくは鄭乃國の俗



二月己卯日蘭とあつた客く不祥と被除とあり  
 皆經代郵風と云ふ言考をみ清り活せらるる強後  
 ゆれえろ代姑之一ま車介り一  
劫萌後返陽氣敷也握芳蘭臨清川乘和鑑禦用徽本社共蓋取法  
 矣源文粹集令三月宴序云酒食出于野曰禊飲古俗也  
 我 報ゆえ水乃宴とゆらるる車 弘宗天皇代  
 御宇より始なりさうはまゝと云 國子と曲あり  
 乃氣の初海とるもろくく人をも中修えたるも  
 終集合編は日本三月三日有桃の花水宴とあり  
 新後文今よ定家はゆめあま乃奇り  
 史よりあまき書厚しひ乃もくあめ名もあま

あつた花代さうのあ 又とら方あま分よとあひ  
 かけひのあめはあつたゆらるる代なると  
 ありまあまをたまり  
 ○又今日詠合とらありあり世後河をよとくともう  
 乃事と中明とら中門たあまを離と開とあつた  
 しかたなく後よつとあつた少見あまるとあひ  
 治結坊とあまをさまを離とつたせとらとあひ  
 明皇八乙酉の年生きたるは在關詠とみあつた  
 一よりあまをたまりとらあつた  
 今按とらこれ唐乃あまをたまりとらあつた



樽桑房記卷三

この書よわたり玉燭宝典よ多食乃常城市  
 各雜と關一めく我くはとつり又漢明代り諸  
 とはくそく知てぬりもまじくさや信りたはよ  
 とりた乃家系の本事ハ清和のり代事なり  
 かろ事くそ我國子も日難合とらくわおま  
 關總代事ハ左傳よ及えゆれはつり下りまき  
 ○日艾と五徳く戸よまけ風ふけく家一用て  
 よく平金月今よ及より又増年よ及もすあり  
 ○今日の代わくそのぬり事よひぬかりそひそ  
 しとれた人形とくわくぬりりりむかきあさびの

事ハ源氏物語をくも及くゆれはあ一とあり  
 一とあり又源氏上十とあまぬり人ひかぬれそ  
 ひかぬれくそのぬりあま十とありりりそ  
 事ハ一又遠子とく事ハ人形ハ衣振とぬり  
 て三世帯あくせきとこれとくあそまきあり  
 源氏上代とありあまうははるりる人  
 他りゆりり抄よわまるハ三葉よこれとわかれあり  
 諸事とこれとあまきと事ハ乃とつりりりりり  
 晦日休居今日と二月終りよあまう表ハ陽節ハ四  
 行て天字融りよ草木ぬきく多事坊用人の  
 無氣と和暢とらとらぬハ花貴也とて元くさる

かみ次をこころとてまはればく日すまじで都野  
ありそひふあふ也保して部老と奏一春とこ  
有し後撰集一久河内那恒う奇

くれてこころはひくふかたまの目とてはれまき  
ふふきくきん 玉懸集に三月先れんと大信は  
あますくわくしてあふふ乃後とまき一  
らふいつくせん 又お大物云ふ道の手り  
あくらゆくとまはさくはあやんもまのこころ  
あつらひもあ

賈島の三月三日晴劉渾更詩

三月三日晴 風光別我若吟身 花忌今夜不  
須晴未雨 晴後好是春

清明 三月三日 酒食と云い日より一六  
先此れ墓前と掃塗して多とたひるのゆると  
これらう一とくハ風俗をりこころ強子強  
食と十月朔日展墓念可為 草木初生初死 志  
女禮志 志のりハハげ日祀先乃墓前より  
て厚と一豊約るれ可い南久一

害とを教して整美とありては又舊に  
て移と先之うす又通とややくちをく人び  
先礼と及るるの母依親戚男女と客とる不替  
と扱ぐ深染を強む人情と通しけ宣と云  
致子孫の世に傳ふと云ふ人となす平  
強獲樂をとるち介たり

二月天季うく日あし一あし屋宅と云ふ  
と修造一或茅屋と葺改板屋と修葺と  
二月治屋の心約森多と田舎厩子と記  
は月菜蔬花多よ菜多よと種一或修の菊苗二月

初又ハ中旬よりえてくちをれは  
有凡蜀黍玉蜀黍荳蔻烏羊紅豆  
豆赤豆刀豆胡麻薑眉兒豆黍石竹地芝草麻子  
荊芥香蒿をといは月乃菘のち  
紅豆々二月の中より初と種と  
やうくうゆまのうれ実のうる久し  
まかよりうゆ一凡菜蔬とゆり  
しとるなれはちやまのうゆり  
うゆあり又その地氣ハ  
りて一又は月本と扱一

清明乃あ後二持てうしと月令廣義より見ゆ  
 三月三日蕨と九斗して灰とくまぜ日よかへてはやく  
 かへり度と洗をて又日にけり收まへり食する所  
 湯よひてうしを月四或る葉を用の乞書  
 新書乃流るり或垣淹りて筆へり垣殿ハ乾殿  
 まるれりいんとなまぬ垣殿ハ用やと干殿を  
 野くまへて信は用ひてうし又蕨も狗脊も垣淹り  
 元節のけりもいちまき乃後七中又日と期とまてうし  
 蕨好り書よんゆき今世於部乃ひとある梅を  
 ままれば後六日といひて登れ野すり春野ハ山中

春のまてまき乃後六中又日といひて花候より年  
 乃新臘にりの上山下はよりまてうし一連連  
 うも大やうたがらひま良ま部乃ハ市松をひて  
 梅二十日あまうかへり一旬二旬或一月也  
 うし花候よりうし一旬二旬或一月也  
 化和寺ハ梅ハ洛中よりうしかきく強るる梅は梅  
 色に和さるはけりうしちりたうし  
 此月小蒜及雛みと食まてうし又禽獸乃又臘と食  
 事なりし生薺瘴麻肉と食まてうし凍菹と食  
 瘡毒熱病と食は並とくハ被と食  
 今令座を身  
 梅葉を食

強まらぬくく生と殺ともうくして天運不絶人を  
去る命と逆しむ百支の心黄龍菜と食す  
魚龍と食く化せられん宿疾を去る

二月八日古候才一桐始新才二田鼠化為鴛才三蛇始  
見大清明の二候あり才三萍始生才四鳴鳩拂  
鳧鴨才六裁勝降于桑 大穀るの二候あり

清明八日二十四刻十分夜四十七刻十分穀返ら  
至五十四刻十分夜四十九刻五十分 月令慶長

日本書紀卷之二畢

日本書紀卷之四

夏

漢書律曆志よりく夏は假なり假はたまり穀物假大なり  
そのまかりの節雅よりと特曜と云〇穀物小なりとけせ  
しあつとつよまかりなり  
あとおぬす穀物乃義と云

素問よりく三月これと蕃秀のころ天地氣交  
穀物蕃茂す夜は臥し寝く起せ臥於日忘し  
て嬉るるをうくし先英華とくし華秀を成し  
天をよみてして泄るるをくし女をくし畢く出し畢く  
運し長と継ぎを掲げん氣は夜より水にて露  
也れ送るこれと運しけんと傷りてを収む  
者か

千人方いらく元々の方面とらへて妙なるを  
人として面皮あつく癢を生く又面風とあつて

又曰五七廿二日苦く味代食物とを記辛くをすて

肺子と書かへ

肉行にいつく夏月冷石洗拍子と枕を添へて

なつれ大に人の目と換へ

苦生福よいつく夏月身を熱ありあま菽を食ふ

これと書かへ

全透果略よいつく夏月徳禽獸乃心と食ふと忌め

死争我靈書と犯さる宜く苦菜と食して

これと書かへ

月令廣義よいつく夏月より九月より下りあつて一切瀟沔

及水とのむすこと忌み又あつて鹽滌き

又いつく夏月腎氣衰終とあま房色を度とんば元

氣と傷り来と換へ宜戒之

又いつく汗乃衣裳よ透りて日お晒し又これと忌

まはるあつて癩子と書かへ

書書最書にいつく盛夏熱と徹な冷水あつて

すまぬ腫と乾板やむすくや沐浴とるや切

焚火へ一又冷あつて足と濯へ



又曰く夏は暑時を存せよに生肌と云ふは暑熱の瘡  
と云ふ一冷を以て瘡と生ず

又曰五月ハ心胆一腎衰小精化して水となり秋は心  
肝凝丸保膏して法氣を固くして冬は心腎衰小精化して水となり秋は心  
胆中温暖あり生肌果荔枝冷水冷淘粉粥蜂蜜丸食  
へうの気と食とれは多く秋は心腎衰小精化して水となり秋は心  
冷水と云ふは汗流して皮膚を冷し骨を淋く事あり  
人をして寒熱眼眩く脈脈厥逆一霍乱水筋陰黄  
ハ瘡と云ふは心風は毒なり多し眠中ハ人必  
走く扇と揮ひし事あり汗流毛孔開展走く風

へやひこれと世ハ人として風痺不仁言は瘧疾  
と云ふ一む年壯にして即言と云ふは心腎衰小精化して水となり秋は心  
を瘡と云ふは心風は毒なり多し眠中ハ人必  
瘡中よりこれと云ふ

後志人より夏月肉は供法あり冷水とのそ瓜推生冷  
の相宜く少く食一かくれと云ふは心腎衰小精化して水となり秋は心  
と云ふ一む年壯にして即言と云ふは心腎衰小精化して水となり秋は心

夏月暑は傷と云ふは身熱たれり瘡と云ふは人なり瘡  
これと云ふ瘡と云ふは心腎衰小精化して水となり秋は心  
又万葉集十卷大伴家持吟嘆瘦人瘡と云ふ

石麻呂爾吾物申夏瘦尔吉跡云物曾大奈伎  
取食 纒縹魚乃之瘦と治る事箭書子之  
見之ゆり糸くげよさこま之三事あり

四月

卯月 卯月乃節時海之中○卯月此其名孟夏 卯月  
乾月 卯と仲夏○卯月乃和名と卯月と云卯のち書  
しつらゆりしつら卯月しつら  
卯月りと奥義抄よるえり

朝日國信今日より又月四日まて 禊と恙ゆりと日と夜  
どしつら古方にゆかぐりゆり

八日 滋佛日あり 灌佛とつらつら 佛は是の滋佛と  
あり 都梁香とつらつら 佛金香とつらつら  
色ありしつら 丘津香とつらつら 佛子香とつら

て 黄色水とつら 安島香とつら 玉色水とつら 佛頂  
漬くとつら たり 彫建れ 佛とつら 洗とつら 小とつら ぬ  
本朝みく 今日佛と水と 浴せしつら びつら 推古天皇  
の御之つら たりしつら まんしつら ん

十五日 浮屠の結夏 今日よりつら たりしつら たりしつら 七月十日  
つら たりしつら 結夏とつら 解夏とつら 云い乃九十日 結夏とつら 外  
よありしつら 本朝香とつら 結夏とつら 結夏とつら 結夏とつら 結夏とつら  
たりしつら 結夏とつら 結夏とつら 結夏とつら 結夏とつら

明日 沐浴

今日 梅雨とつら 先とつら たりしつら たりしつら たりしつら たりしつら

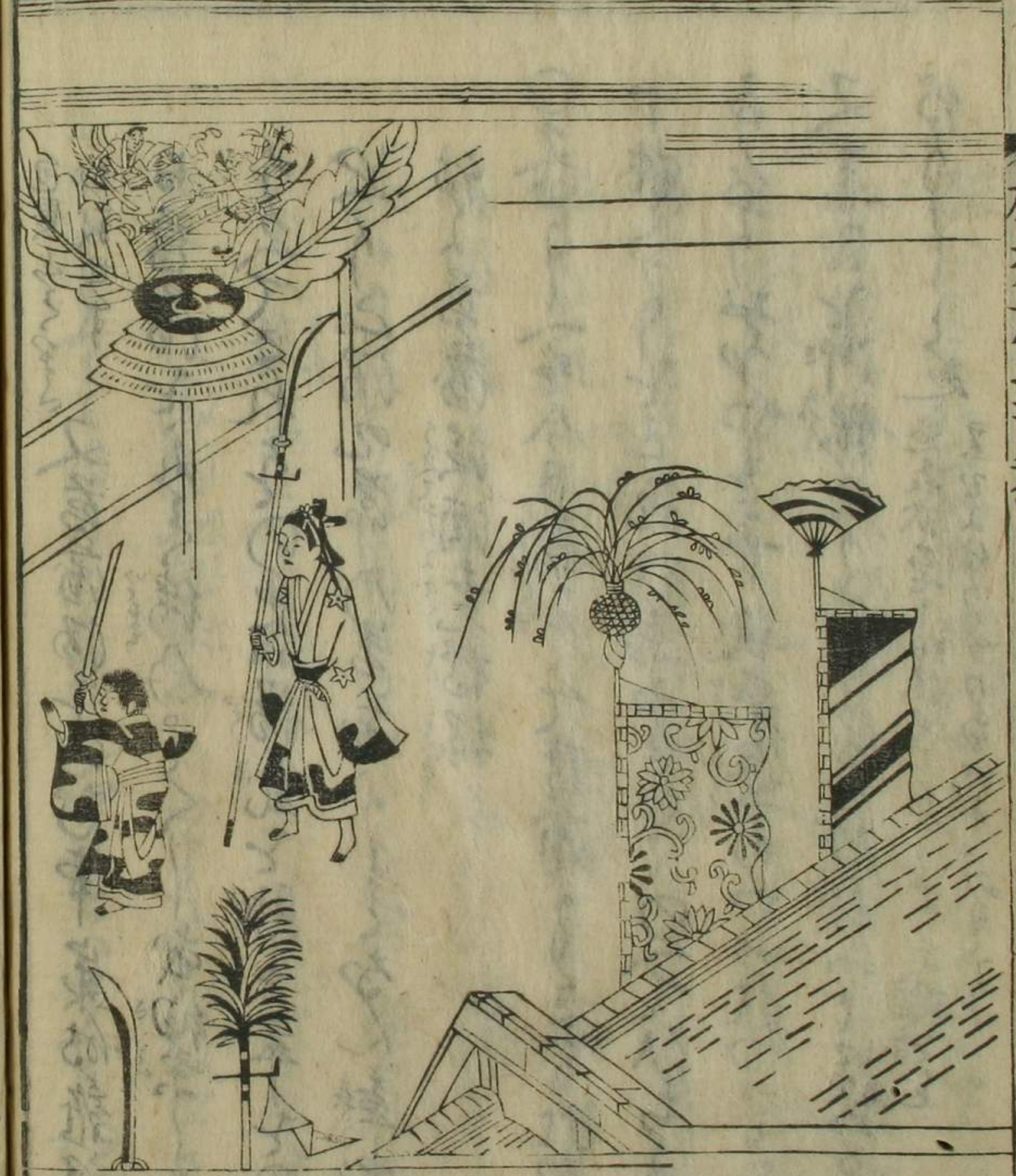
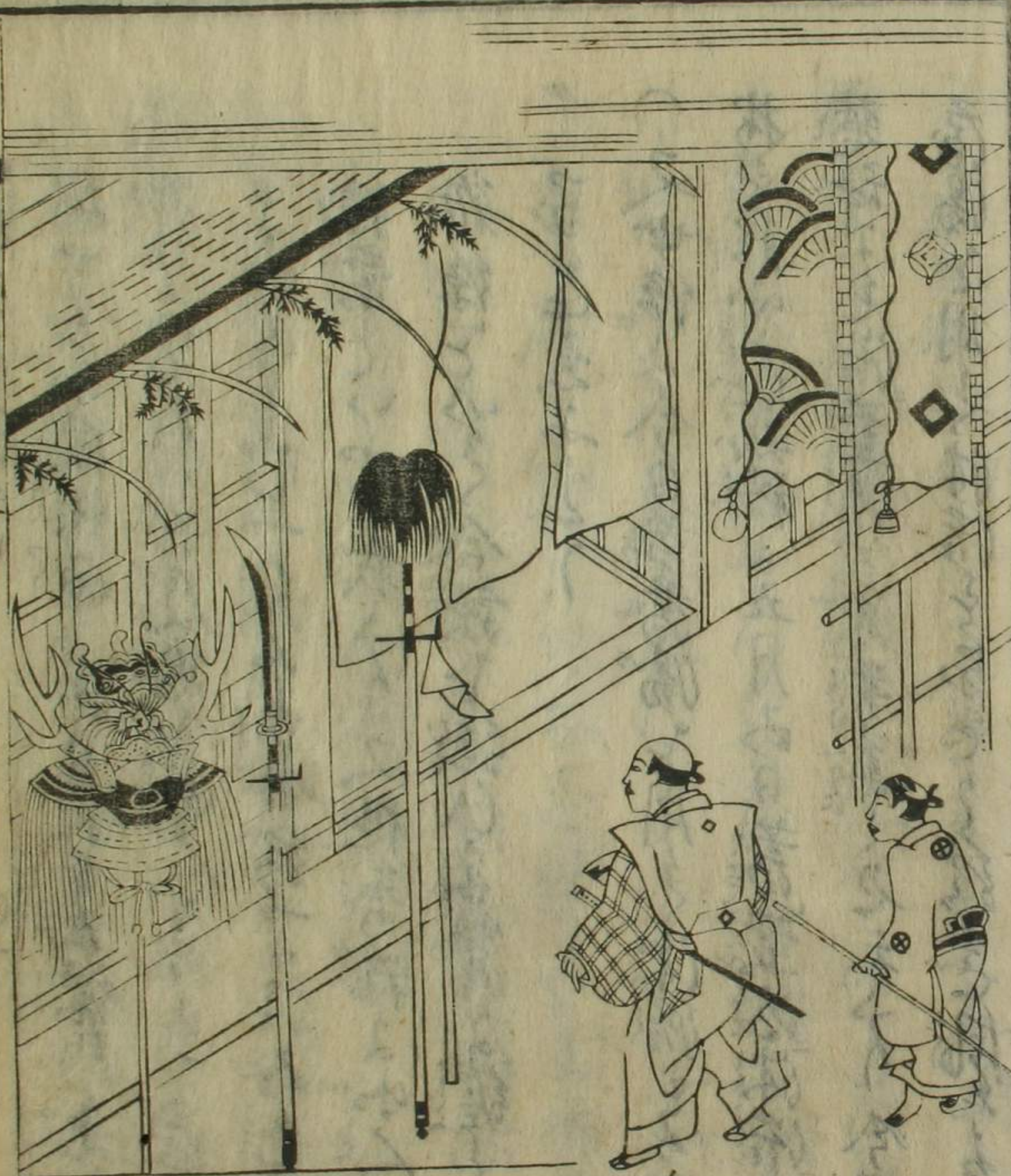
















二つは日暮しり勝有乃本とてる場八西の方ね楓葉  
 有り気よりわよそ落くろく葉とくれろくと見とす足  
 抱れ法人群集とる次故よる坊れあつりいあせして  
 大木の柵れ樹よのりしてんやとあゆにんろと有りる強  
 村は横あやまの立有りり立るものい坊れあつりに  
 多らるるさう杖をついてさひ有りるくたせまあつと  
 乃ろにろろろらに群集れ中へけとあつりんていよ  
 こお竹杖とつたてくる乃強よりきさらよなるやと打  
 たつまのろろ完くとあつりこくに強のあつり強りて  
 横よまれ葉よのあつりあつりあつりあつりあつりあつり

鳥よあつり葉とつらあつりあつり又人ろ川中まてんあつり  
 りて川よとち衣裳とぬくしてろろとあつりまひい  
 潔斎とちゆとととあつりあつりて密人の様たるよりあ  
 ちたろろあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 なるすあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 我あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 ひりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 ありあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 記多あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 ろろあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

博桑歳時記卷四

十一





又章第云り誇又今朝蘭草の宜男と何の歌あり  
 蘭多乃行小共國今終結盈襠百多香このゆり  
 百草の汁と持する勢と膏と膏草に記を  
 是も百病瘡を貼して膏の膏草も功十倍  
 せり又今朝日未お内百草と持く汁とつこ出  
 石灰と和志と餅と塩糖と一切の金瘡と浪  
 じと月令廣義も凡之なり  
凡之なり牛膝を貼て膏つて決瘡  
 重草多ハ毒草ナリハハナリ  
 ○夜草草とと丸細の日なり又艾草とと丸細の  
夏草多ハ毒草ナリハハナリ  
 五月標文治百病

と但艾乃苗よりけりなりと錢名煎英の  
 乃之なりおれなり艾の代名とすなり又標内  
 くれの用へりゆされも使ひもくさの性なり又紫金  
 錠生金丹千金錠と名と合なりあま今日より  
 ○又今日慧液と名なりこれ唐原と名なり小迷意  
月令通考云ハ地也と引て慧  
 液ハ越こ句越ハ始と記せり  
 石屏り踏午乃後也  
 榴花角黍舊時新竹處也石流標堪美江湖  
 老詩客也隨蒿艾上柴門  
 又 友人  
 滿榴花上滿る百寸切草湯洗漏醜今日獨施無用

や又痛飲強難強

十三日 以日竹と後栽へ一書に又月十三日と作碎  
照らす又作迷日ともいふ此日竹とうゆといふ  
酒の流とあり

明日 休居

以月淫友ありこれと梅返ともづく又徴取ともあり  
梅雨れ中肥土の芙蓉石梅樵たこの枝とあり  
てさびしし月令廣義よ見えたりは時甚上  
つし蓄菰水櫃をうせと甚しく活又家家人功  
と記す之奴僕事と廢しおこしし家事調

りし一梅返之森の中を流僕をうて薦とあり  
庭とほろししむし一舊書籍悉く食油等と  
新と裁しる草木茶流よありの場屏を草ゆ  
る幼用度し又梅返必と大瓶と貯金糸と  
とれいたれつと美ありと茶湯に刃え下但日  
とへてお飲へりし又梅返ありと病赤を洗へ  
るれおとれし一書と他りしこれと用事ハ  
やとく衣汰ありしとこれと月れハ所けの  
お垣り食おとありし見えたり  
梅返お入り説給しし一決し冠し屏殺し



梅と瓜は重畳乃物に塵耶ま人の中陰に帝なり  
ゆふ善くとりとあり西事とのぶくととり等サヤ  
中夏生ハ七十二候乃内なるの才二候なるハ乞に  
附合して毒徳をとりを

夏正の日井と後水と改れハ瘧疫を止すべと漢代礼儀  
志よ見たり又夏正乃後丙丁は丙は日まぬの交  
とされハ大にありと千金方ハ志りたり

八月乃初毒梅と瓜皮と乞り梅と瓜葉ハ入出上り  
はハ善く後收用く鳥梅ハ皮木くは時と乞り取  
ハハ又梅つる梅りをも製成ハ

此月米苞を改束ぬハ一束くハ苞ゆりめハるくす

心生ハ又反乃る拾穀乃灰と多く米苞にぬり並ハ

八月天樞中腕もよ矣ハ是月のハ乞りくハ保善すハ

又梅葉と保善すハ一梅致餘論よとく乞ハ於ハ

宿る漢味競く葉ハ於ハ護也保善金水二勝ハ燠火土

之胆尔

月令よとく是月也日長正陰陽氣死生外君子戒

掩刃母澤山勢色母或進居滋味母政和節者欲定ハ

日是月也ハ居之可ハ毒胎望ハハハハハハハハハ

保善ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ



おろし先雞さきどりれ毛けとひくその中なかにとくくろまるれ毛け 旋まわすものさしれりこれ毒どくありあり

此月このつき並ならとくくろ力ちからよりく目を挿さす金かね匠しやう要よう暇ひまよ月つきを

下した之の煮に餅もち鯉こい魚うし雞とり及および未ま熟じやくせきり果くだものとくくろゆりかたれ

鼈かめと鮑あわび魚うしとおれく食くへくひ又また枇し杷ぱと炙あ肉にく糞ふん麩ぶ也なり

おろしく食くりやうんげん 月つき令しやう度たふ義ぎまきま 干か金かね方かたに持も席せきの肉にく

と食くりやうんげん又また金かね匠しやう要よう暇ひまよ月つき泥どろ中なかの傍たもと水みづと

飲のりやうんげん魚うし鼈かめ乃なり精せい沁しん肉にくにけり毛けとのめめ瘕けとなり

は月このつき農のう人にんの田たに苗なえと挿さへく又また圃ほに大おほ葱ねぎ乃なりたねとく

ゆへく烈れつ日じつよよおととちやうく

又また月このつきのち候しほ才さい一ひと握にぎ娘むすめ生なま才さい二ふた賜たま始はじ鳴な才さい三さん反へん舌した也なり

右みぎ芒ぼう種しゆ丹に三さん候しほちり才さい四よ席せき角かく解げ才さい五ご際さい始はじ鳴な才さい

右みぎ中なか友とも生なま右みぎ友とも生なま乃なり三さん候しほなり

芒ぼう種しゆ登のぼ右みぎ十じゆ刻こく二十にじゆ分ぶん夜よ三さん十じゆ刻こく四よ十じゆ分ぶん反へん正せい登のぼ

右みぎ中なか一ひと刻こく三さん十じゆ分ぶん夜よ三さん十じゆ刻こく三さん十じゆ分ぶん 月つき令しやう度たふ義ぎ

去月

節せつと小せう異いと云い中ちゆうと大たい異いと云い○去月きげつの異い公こう季き反へん月げつ皆みな 御ごを極ごく終しゆうつよ○去月きげつ乃なり和わみとみせ月げつといふことにはつじ

朔日しやくじつ賜たま冰ひやう節せつと名なつく今日けふ冰ひやうを食くりやうり梅うめとあり

仁徳天皇にとくてんかう廿六十二年にじやくろくにじゆうにねん又また月つきに額ぬく田でん大たい中ちゆう若わ宮みや子こ團だん鷄けい也なり

今春の如きは出給ひ申すは雪の中と云やう  
 給ひしは廣産と給ひしはやうあるは何れの人  
 つくして人を見給ふは産ありと申す何れの人  
 何れの人に何れの人を給ひて何れ給ふは氷室  
 氷室その氷といひやう給ひて細むらと何れ  
 給ふ給ひて氷といひと一丈給ひ給ひ給ふ給ふ  
 多に草蓋れと云やう給ひて氷と給ひ給ひ  
 やう給ひ大旱も給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
 何れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
 何れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ

今春の如きは出給ひ申すは雪の中と云やう  
 給ひしは廣産と給ひしはやうあるは何れの人  
 つくして人を見給ふは産ありと申す何れの人  
 何れの人に何れの人を給ひて何れ給ふは氷室  
 氷室その氷といひやう給ひて細むらと何れ  
 給ふ給ひて氷といひと一丈給ひ給ひ給ふ給ふ  
 多に草蓋れと云やう給ひて氷と給ひ給ひ  
 やう給ひ大旱も給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
 何れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
 何れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ

今春の如きは出給ひ申すは雪の中と云やう  
 給ひしは廣産と給ひしはやうあるは何れの人  
 つくして人を見給ふは産ありと申す何れの人  
 何れの人に何れの人を給ひて何れ給ふは氷室  
 氷室その氷といひやう給ひて細むらと何れ  
 給ふ給ひて氷といひと一丈給ひ給ひ給ふ給ふ  
 多に草蓋れと云やう給ひて氷と給ひ給ひ  
 やう給ひ大旱も給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
 何れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
 何れ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ







三やえりくすの縁さの月をくくくは河系り  
 ゆへりせく月のあつたとそくくくくくくく  
 一月晦日ありくくくくくくくくくくくく  
 念ふ心乃ほほくくくくくくくくくくくく  
 疑之古人古月之必出川至臨城之納原及德  
 作之趣及訪報之無恒例也不限晦日也程訪月  
 務也之は或人記佛念小令人可參時月被  
 く中備之件被六月十日也也は張よれハ  
 強よ晦日之路くくくく  
 九夜之候しきく候人多くいひあふせり九夜や中

夜三月九十日あまのくくくくくく伏し金氣伏是日  
 あり何のくくくくくくおまとしてひまきに木よ  
 志く冬北水よかたの水生木なりなほ火のくく  
 志行木よりの本生火なりをわきくして秋の金  
 火の金生なりたりたれ金にいでるの火より  
 火を金くし金に火は火くくくくくくくくく  
 くの伏候す庚を金なり三伏といふなり乃後  
 第三庚と初候くくくく庚と中伏くくくく  
 第一庚を末候といふなり三伏といふなり乃後  
 く候す肺乃大空に就くくくくくく  
厚為秋  
也

梅面書く法書と日よ物と一紙書よひる書表  
 紙とよひて於て帯繩を無く物と表紙の換す  
 天氣好日ありとも一日にて夜たり一紙を  
 一午未だは收む晩日の暴風の交りたるや收  
 止し一層下よあつて燭をさかして一夜まで明  
 朝方に細む凡書を晒すより一紙よ多晒より  
 らひ暴風のさる也あつ又多之れは古奴厭ひ  
 使ふ心と用ひす書とろこあふる何の換  
 あつ修繕しぬらとら多と細い縫く古故の  
 一紙換中し納各とあつとせし一紙書と用ひ

屋中に久しを晒さんよりかたはく烈日に一紙晒  
 たり書と多し晒すの志より毎年久し一紙を  
 ともいさう書代換すより古人を書と知よとせり  
 一尺より一尺もえと色なき紙も表紙と下よ  
 とは也よとくくは居るに用よとて古人書と  
 多に多く書と用く書ととく今ハ七里香一  
 也とあり  
此七も書ハ山懸れるや書ハ又る書多り書ハ五カ  
 乃ハ細ハハハヤヤつて 又齋書と書厨の中よ入るハ書代  
 換すかろつとる  
 所く一はは挿紙を角つとえより

圖書を讀むも一紙許日と晒し一紙を讀む書表





煮られし衣服と滑石天竺粉等分を煮て  
 付粉煮しり河又魚一五枚を煮いで自煮又  
 洗しり亦二碎粉とひ移りけ糞汁とこれと  
 のをいれしり又糞と用て洗て色す添  
 一けが煮しり衣服と洗よの杏仁椒等分を合と  
 研爛して洗しり亦と撈て淨く洗しり自煮又雪  
 洗しり衣服とい冷めりく何くハ蒸又白衣と洗  
 一蘿蔔乃黄汁又ハ蘿蔔を細末して水に  
 入れて洗へハ少くなりあり 此は丹東の伝  
此は 此は蘿蔔を煮て包ちりて口とひりす

目小あてて晒し一年を煮れし新しき丸散の  
 千金方に云く薬と云く日平そかくれ薬力  
 うとく片の煮まり常用のする薬ハ口口ハ  
 新瓦器に入ちあてて乾しり用り付事初て  
 又好まし一年を煮れし新しき丸散の  
 薬も如きはしり一とく丸散人薬と煮しり貯へし保  
 護されしり薬味なる事を知る次薬丸人を  
 煮しり病をいれし物もれし煮てしり收めたる  
 乃ぬきしり煮しり一とく性となす一  
 ぬきしり新瓶を煮しりぬきしり煮しり

本草綱目卷四

三十一

白と黒と対し一まゝ一少ひとれハ久しくもてて  
くせは是事とたゞの良法あり地を白並あは  
羌活きやうかく門首もんすう神麩かむ黄芪わうき甘草かんさう大だいの  
くす物たりてちねを志しき原よりあられ氣味  
とくちりの也

鳥物とりものを短みぢくすものハ美く物と一うすたねも  
くす物くすものは数日よ物よりあられまじりて物と一ま  
下乃くだの強つよに感かんくま一うすも補ほけけぬく  
あよりけま一うす中よりうすの志りて日よ  
くす物くすものはこれむすの物ものを深ふかくうす  
くす物くすもの

物もの中ちゆう正せい又またハ五ご倍ばい子し鉄てつ漿じやうくす黄わう活かくくす  
子しと收しゆりて其その後ごハ其その志しの整せい漏ろうり  
物ものへ子し取とりとしく一いつ粒りゅうくす一いつ粒りゅうくす  
と終しゆうては短みぢくす心こころ石いしハ川かわ板ばんと黄わう芪きと  
汁じゆうあき松しょう樹じゆ皮ひと一いつ斗とり子し取とりと深ふかく  
潜せん種しゆう麩ふと刀たうくす又また進しん乃の汁じゆう黄わう活かくの汁じゆう  
浸しんして一いつ斗とりまては短みぢくす又また秋あき乃の刀たう子し  
撞つう候こうと入いれて短みぢくす心こころ石いしと一いつ斗とり  
じ月げつたれりて一いつ斗とり短みぢくす心こころ石いしと一いつ斗とり  
一いつ斗とり一いつ斗とり短みぢくす心こころ石いしと一いつ斗とり

魚羹イサノモ食タビ方カタと申まをす  
月令ツキノコト度タビ多タビきタビるタビをタビりタビ又タビ夕タビ月タビ生タビ固タビとタビ好タビむタビはタビ麵タビをタビ  
うどんウドンのタビこタビろタビおタビもタビ間タビとタビらタビわタビよタビつタビいタビしタビ神タビのタビ中タビ入タビ  
進タビハタビ久タビしタビてタビ指タビ差タビのタビ麵タビをタビ併タビとタビらタビしタビ合タビとタビうタビしタビ也タビ  
片タビをタビ角タビとタビ見タビてタビしタビ又タビ膝タビ雪タビ水タビをタビ新タビまタビらタビはタビ魚タビ肉タビ  
とタビ漬タビしタビ進タビハタビ揚タビまタビすタビ

又月タビ又タビ羹タビ一タビはタビらタビ菜タビとタビこタビもタビのタビしタビけタビハタビ味タビもタビたタビらタビかタビりタビてタビ  
性タビ向タビくタビたタビらタビ酒タビのタビ又タビ志タビうタビらタビとタビうタビらタビくタビはタビとタビ能タビたタビらタビ  
ふタビ強タビとタビ旨タビくタビ井タビの中タビよタビとタビらタビのタビ此タビ意タビのタビがタビ一タビとタビらタビにタビ  
ひタビらタビやタビとタビばタビらタビけタビまタビらタビしタビ一タビ之タビをタビたタビらタビしタビてタビはタビぬタビまタビらタビ

酒タビ也タビ少タビかタビふタビらタビくタビまタビらタビしタビ

此月タビ山林タビのタビ中タビもタビ雨タビとタビ多タビくタビ儀タビ等タビ一タビ山林タビをタビてタビ  
亦タビ多タビくタビ買タビ貯タビまタビらタビしタビ一タビ亦タビ取タビれタビ味タビのタビがタビ一タビとタビらタビにタビ貯タビてタビ貯タビてタビ  
しタビ一タビ又タビ炭タビとタビ買タビ貯タビまタビらタビしタビ一タビ

菜タビ瓜タビとタビ多タビ買タビとタビ蒸タビとタビ一タビ脯タビとタビ一タビ

○乾タビ瓜タビとタビ一タビらタビゆタビらタビ法タビ 瓜タビとタビ二タビつタビよタビまタビらタビぶタビらタビくタビ一タビとタビ蒸タビ  
瓜タビ乃タビ片タビまタビれタビのタビ四タビ八タビ九タビ多タビくタビ塩タビとタビ入タビ一タビ夜タビ押タビしタビてタビうタビけタビ  
餅タビ乃タビ片タビかタビ一タビうタビやタビよタビうタビらタビくタビ一タビ日タビしタビよタビくタビ日タビよタビもタビもタビ  
久タビしタビもタビ也タビ多タビくタビ久タビしタビ又タビ蒸タビ置タビよタビばタビらタビくタビ又タビはタビつタビめタビらタビりタビてタビ  
煮タビほタビくタビしタビ一タビ

瓜と糟淹なまはむらほ 世倍よなちちららにつけと云瓜と云  
 母ははのこ子こ孫まごとならしくうらしとそをあらびてある氣  
 乃才のたやうよかんく瓜乃片のまれの肉は塩の分め  
 不と入瓜乃つくを瓜分目を入樽よ入よくと一飯  
 かけ二飯ゆめくなかしを塩けりてあらびて塩け  
 乃かくはやうく日よかく瓜は糟を多くめうけ  
 せんとな瓶の入をくて瓜のつきあらぬわうけでるれ  
 うよ塩とあられありしらくいにままり糟も塩ぬ  
 せんとくの一大抵糟を斗よ塩め合をしせんとく  
 糟多く瓜をくたたぐの瓜多く糟すくたたらし

倍の数ようすに瓜とはく一瓜めかととつくらぬがら  
 世とくの瓶の中の風ひぬちにあるを一とと  
 赤玉小さぬの塩一樽をひらきぬ瓶のせん  
 瓜つけらく一樽よつきらくと一といふに  
 乃とよくならしく瓜は瓜くらつけらくつきら  
 乃の一又瓶を瓜をあらす一二飯塩よつけを甲と  
 乃けくけと甲糟よけられハ瓶美を入  
 瓢子あらすと平拍ら一表塩淹らして貯まく一  
 〇乾瓢乃乾法ぬ天氣とうくひゆらすと上屋と  
 乃のままで樽をあらすと各うよくあらし

煮入レテ後乾かして繩よりけくわひきりて  
天穿わくくたのこく氷入天氣好時五分一  
繩よりきくわひきりて能ひる何壺まで入おきめ  
煮入レテ大代こく切して後沸湯よりけく又やせり  
又魚印るしととも味あえし

○塩辛瓶乃製法 瓶と大片的切塩よりついで押と  
うりきりて口を口けてるけりかきりて後つ  
こへ細ききりて味常のくへに中へさる中へおき  
○乾茶子の法 口より茶子と瓶皮と煮てさるより  
て中重里の内取のくはるきりてさるより

小煎 地はお煮ききりて茶子と梅干は瓶の原

○煎豆塩淹の法 米粒きりて塩けりて合えり  
りて煎豆と煮るより梅干けりてさるより  
子も又かきりてさるより

○梅油の製法 大豆 大豆 塩 各一石 水 二石二斗  
煮てつら 先大豆とあつてさる粗白く煎きりてさるより

石臼より引り大豆と煮て大豆乃こく煮て大  
豆の粉よりさるや梅干はひらきりてさるより  
煮て梅干はひらきりてさるより

石とれ大燻みくよく煮るも極湯と大くたきま  
 しくおきひこしてをわりのらふとならぬ親  
 他へ入るもあてまう他へ入るもよく拌初より  
 家内肉の重なりより一表寸分又日乾よまてし後  
 同よみ入るもわりの水入るや止か入るより一他入て中  
 ぬりや、色よく懸と入へ一右代紙たじを少くい白米を汁  
 又水半斗入粥を煮て塩を汁入る拌世に仰冷する  
 西大れお油粉よ入るより一日乾三日乾よく酒を  
 こしこしよくふるも入桶のこらるよ元とわ希を桶  
 よ入るも入りしより一上よハサと懸まへ一初

作入一日より九七午ぬりやとて何らつものなり  
 洗よ志やりの後蒸味掠たつよ昆布と切し金魚  
 味よくならせり

○ひりの製法 大豆 七条 大麦 七条 塩 二条 水 七条  
 まいりのやとゆくのうまぬれせり一豆ハ焼て引くの皮  
 と志まきしやたき世にこまてむし一土を少く入麴よ如  
 たり時水と塩しつよ今煮てまよ一瓶よ作りたて  
 他へ入る後日乾日乾一味をとり何月一瓶の  
 口と飲よきたるやぬきたりわしはすく一志よくされ  
 思ふやうな製法よ由思よ今も尚何合するといふ

六ノ一ノ瓶命はと志をく野くす

○漬大豆の製法 大豆を山麦粉と先玉豆  
とを大豆れとく煮糺し中麦の粉を衣し煮  
み入麴をすくろりきて水で煮よ塩を入て能煮て  
梅を入すり大れ麴とくくして塩汁の内よ入又  
煮く生薑の椒皮陳皮たくとく煮ろに割てり金  
乞も麴と一内よ塩汁の内よ入すもして煮  
をうけ煮に塩汁うくとく煮ろ金丸を附のく  
先十日をくして味よく付すり中内よ煮れ煮と  
煮てもあるひもせか日よりして壺に漬免す

○又納豆の法 大豆を大麦を塩煮大豆と  
豆れとく煮く煮とすくくして粉り大豆れわつ  
る肉を拌むろとくけく一夜至次の日煮か  
煮豆よ入かすくよゆきせく後塩を入水ハむろり  
よ入て七日ゆく至率皮をんまう毛そのと志を  
白胡麻陳皮よ入三日やとゆとくけく煮丸出  
日よりして又ゆくと煮る付あるとし煮丸出  
○金の毒殺の製法 和別海しちの経巻也  
又西京海用りてり大豆つ米りて  
煮く皮と去麻と細くとあらひゆく大麦一  
能煮く煮くく洗あよる煮後大麦と麻掛

乃大をこくとつらうして蒸く糲したる時細末のを糲  
 と拌せ土をまよ入糲せく糲するにそ糲麩の付  
 へて一日おに蒸 かてつらうと切らう 白尻 これもきんや 塩田 まじりまきや  
 合太蒸子と尻をこつ合乃塩を合せ糲を入せうけ  
 一枚玉明りうとあつらふと糲をひく一尻蒸子を  
 糲のしをかきまよせく糲を入せうして糲のしとよく  
 うけ蒸毎日一二つなりぬませ十日許まで後苗考  
 の糲皮の板糲麩の糲を能く切く拌又あの  
 しくあつらうてまよせうけ蒸毎日うとまよせ十日  
 まで用へし二四十日よ及の糲味つくまう後まかり

五條のふきまろ丸人乃好まよる  
 ○蒸年醗の製法 醗く酒く等らう合せ蒸く蒸  
 糲くはとあつらうは月去月乃中壺あつらふや  
 糲日よ物一七十日をとくこれと月ぬそののま  
 たらやと酒く水とまかつて入毎夜か此まれのの中を  
 又まよる方の中醗くふまう又蒸糲乃まよと削てか  
 うつて入五の蒸子とあつらうは月去月乃中壺あつらふ  
 日利する時糲をよ換糲したる糲壁と糲和と一又  
 糲地乃宅を早まらう時糲と後入糲とよまよ  
 糲沙を入へしはまれの水た氣味まよるまよる



元刀細陰の刀辨をと思月之夜をぬくはこれハ縁本ハ  
底帯乃時をとりぬる之ハ又此月を控る術  
オととみくこ

夏月故虫と古法 養心 本整仁 二千ヶ 雄黄 引研 以上

細糸して蜜をて懸丸とて懸丸とこれと焚く居家  
為虫よりとり又龍乃骨と焼ハ蚊咬免うあされ  
骨よりとりてと川魚の骨ハ焚之ハ皆蚊とを又  
浮萍と葱活とと焼てと月令度我より完  
り又千金月令のハ月ハ浮萍と取く陰平ハ  
雄黄よりとと焚之ハ蚊を辟と志る也り又此月

又日田中の浮萍と丸晒乾し候は其血をぬくこれハ  
漬し又晒し又漬す此はとらとや蚊咬して後来して  
考とと一候之ハよ抄抄と云と居家必候よりとり  
麻の葉とけりてとけりハと蚊咬ととらとや物乾かす  
志よ乃ととり和倍ハ極乃末となくこれ又と蚊咬と  
さつものありやハ刺さるもとり乃末とりとらと  
なりし一古今集急乃部ハ

なすを煮ハやとに事とゆらうわつと虫れハやとら  
とらととととととと 積多大来蚊乃部ハ

来回拜扇摩羅去徳被蓋抄印供除



凡異物乃時移等と信者一と僅て物産を多し  
 世保元より六月まで入房勝似膏膏旨又孫人  
 のくく夏時陰気内より休一異毒加と蒸すくくま  
 甘く風をわたり冷物と食ふあは暴池れ悪と生れ温  
 暖なり物と食飲して大に飽るのみ  
 園業花をよたよの日はよむみまを凌ぐの寒気流し收

てより暑よ凌ぐ一居日年の葉一よ河水とそい  
 冷物お通て花弁ちよ枯るく月令廣義よりえより又  
 老圃乃云物よ地をさめらる用ありと凌ぐく凌ぐ  
 凌ぐよりと但飲ふくく凌ぐく凌ぐく凌ぐく

月令廣義よりく六月は花楊よ水とくく泥土とい  
 乃原羊の糞と糞一いふ多し

秋のは颶風吹あきくハ何くく一めも物とを一梅を  
 圃く一茅を乃梅と堅くま一又梅を梅と物一  
 月並と食ハ目と昏す羊肉とくハ神膏と湯ハ  
 聖息厚鷲菜羹と食よりと忘又生薬と食ハ水煎  
 となる大のぬよ遊るれハ終り悪とすれ冷食と  
 用一冷水生破果油膩甜食と食すりくく  
 凡菜炒燻炙ハ石味は宜く少く用く  
 凡之乃甘瓜と食すりくく瓜のあよハ沈

夏のハ大に毒ありし月今度義より走り又よく双  
 葉乃凡人と殺又油解とせり之を食り次物敷に  
 感志よ此ハ白梅とゆき輝と何まハ凡と食し之後  
 白梅と食し又麝香をく凡と消化す又石骨  
 魚と炙食す是ハ能凡と消して水とをいし中葉は  
 六月乃六候才一温風至才二蟬聲居壁才三露乃  
 学智くまろ 大小暑乃三候才り才四腐草乃くまろ 五  
 土潤つち 溽暑才六つち 大暑内乃つち 大暑此三候才り  
 小暑昼六才刻二十四分夜二十九刻四十分大暑昼五  
 八刻二分夜四十一刻四十分月今度義

土用

ちろこつこつハ土用と移す  
又土玉をくけり

春ハ木旺し夏ハ火旺し秋ハ金旺し冬ハ水旺す  
 五の乃うら土ハ四時よおわくわくすこと事なり  
 春よ完れり位かろ事なり親あくして四時乃  
 初より辰未戌丑月的事ハ以寄胆より各  
 十八日一年よとつて七十二日あり此七千二百との  
 ろく時を木火金水を又各七千二百つ、は、一、年  
 一年とすは志うはよ土を木とせりは春は土  
 用ハ春なり秋の土用ハ土衰老して感なり冬  
 乃土用ハ水と木とれは春ハ水なり土

用也也。金と云ふは乃のまき火よませつる有るは  
 のぞりよと云ふは土まればすよと云ふ金を生ひ  
 有る秋乃金と云ふは土より生するなり。未だ月を火金の  
 有るあり。又一葉乃中なるは中央の土一合を  
 云ふは揚ぐぬりの序と云ふは乃と云ふは月金も  
 季夏に次の中央の土とのまきなり  
此國俗之用の百日と  
 云ふ事ありと云ふれり  
此理をたすなりと云ふ

俗説は六月土用は入口蕪及赤豆と云ふは瘧疾を  
 除く今の人れよくさる事あり。これハ保氏物類  
 乃蕪本れ云ふはこねられさるやと云ふなり。

俗の言紙の條よきやと云ふ蕪なりと云ふは  
 下りぬるげりなりと云ふ事と云ふれは後と云  
 蕪は中葉よと云ふは蕪吹つと云ふ事人五月の食五葉  
 以辟厲氣也。蕪菹菹也。又肺病方に元日及  
 人日麻子小豆各七枚と云ふは瘧疾を消すなり  
 これも家初のまきなり。事と云ふはさるなり。此  
 事と云ふはあやまると云ふは月よすなり。やれは  
 人よるなり。

六月土用の由は蕪と云ふは瘧疾を消すなり。此  
 六月土用の由は蕪と云ふは瘧疾を消すなり。此  
 六月土用の由は蕪と云ふは瘧疾を消すなり。此

白乃久く多やまざる用とくそのく強けり中  
<sup>あつ</sup>熱えたり病人は月毎能<sup>あつ</sup>高<sup>あつ</sup>と<sup>あつ</sup>弱<sup>あつ</sup>なり  
<sup>あつ</sup>未<sup>あつ</sup>あ<sup>あつ</sup>く<sup>あつ</sup>考<sup>あつ</sup>て<sup>あつ</sup>し

日本集時記卷之四畢

